

保育士養成における保育実習の抜本的検討 (1) —養成校と実習施設との連携を問う—

岡本 和子

要約

保育士養成における学生の専門的成長の中核は、実践的問題が生起する保育実習の場にある。なぜならば、保育の営みの特徴の一つが、子どもとの触れ合いによる一回性にあるからである。保育においては、常に子どもあるいは自分自身が置かれた状況などの文脈を多面的・多元的に理解し、主体的な意思決定を行わなければならない。そして実践後に反省を行い、次なる行為・実践を展開するというプロセスを繰り返す。このような反省的实践を行うためには、学び手の実践に応える関係性の中で教育が行われることが重要である。専門家としての成長を考慮するとき、目指すべき方向としては、保育現場と密接に連携しながら、学生自身が保育とは何かの省察を行い、様々な発見を行うことが出来るようにすることである。そのためには、実習の際の指導者を、自らを写す鏡として捉えることができるようになることが重要であり、養成校としても、そのように学生を支援することが重要である。このことは養成校と保育現場とが密接に連携し、互いの共通認識としなければならない。

以上の知見から、保育現場と養成校とが協働できる機会や場を設定することは、緊急を要する課題となっている。なお、養成校においては、保育実践を見通したカリキュラムの検討や授業の見直し、学生への情報発信等について、きめ細やかな対応が求められている。

キーワード：保育士養成、保育実習、指導観、反省的实践、連携

I 研究目的

現在の保育士養成において、高度な専門性と実践的指導力を兼ね備えた優れた保育士の養成には、実習施設との連携が欠かせない。

保育士養成における学生の専門的成長の中核は、実践的問題が生起する保育実習の場にある。なぜならば、保育の営みの特徴の一つが、子どもとの触れ合いによる一回性にあるからである。保育においては、常に子どもあるいは自分自身が置かれた状況などの文脈を多面的・多元的に理解し、主体的な意思決定を行わなければならない。そして実践後に反省を行い、次なる行為・実践を展開するというプロセスを繰り返す。いわば反省的实践とも言えるものである。このような反省的实践を行うためには、保育実習は極めて重要である。つまり、学び手の実践に応える関係性の中で教育が行われるということである。ドナルド・ショーン (Donald A.Schön) は専門家教育において教えることは、「状況との反省的対話」として成立すると述べている¹⁾。以上の知見から、専門家教育に

における実習の捉え直しは、今日の重要かつ緊急な課題となっている。

全国保育士養成協議会は、「効果的な保育実習のあり方に関する研究」の成果として、第一に実習指導の「標準的な事項」の共有による養成教育の自己点検・評価、第二に、実習施設における実習指導職員との理念の共有等を目的に『保育実習指導のミニマムスタンダード』を作成している²⁾。これらに基づく実践は、実習施設との連携なしには、期待した成果は得られないであろう。

ところで岡山県保育士養成協議会保育実習委員会では³⁾、数年前から、実習依頼の際に岡山県内全ての実習施設（平成18年度290余園、実習生数970余名）に実習に関する意見や要望があるかを尋ね、アンケート（記述）方式で回収し、それらを養成校と実習施設の保育実習打合わせ会に反映させてきた。しかし、この方法による情報収集には限界があり、連携が深まっているとはいえない。よりよい保育士養成を行っていくためには、保育現場との密接な連携が重要である。しかし、現時点ではその連携が適切に機能しているとは言い難い。真に連携を密にしていく為には、まず互いに相手の実情を知ることが前提となる。

そこで、本研究では、保育現場での実習の実際や実習についての保育現場の考え方など、現在の保育園の実情を知り、よりよい保育士養成を目指して、連携の方策を検討することとした。2006年10月から12月にかけて、実習についての考え方や実情に関する本音を知るため、筆者が園に出向いて園長や主任、保育士（計19名）と面談し、聞き取り調査を行った。対象園は、岡山市内等3市内の今年度の実習園を中心にした合計11園である。先ず、本論では、そのうち3園における実習についての考え方と実践事例を検討し、養成校と実習施設との連携のあり方を探り、それをめぐる課題について明らかにする。

Ⅱ 実習についての考え方と実践事例

各園の調査内容を（1）目的とねらい（2）実習態度と指導上のポイント（3）大学への要望・提案の3項目に分類して整理する。

1. O市私立A保育園

（1）目的とねらい

1) 目的

- ①保育士には、知識というよりも、子どもが抱っこしてほしいと寄ってくるような人間性が問われる。

例えば、ケーキに蟻が寄って来るように。そのためには、保育士はアイディアマンであることである。つまり保育の核になるひらめき、アイディアが求められる。それらは子ども時代から培われてくるものであり、養成校でも重視する必要がある。そして、それらを保育現場で活かせる人にならなければならない。

2) ねらい

- ①子どもの目線に立って行動できる保育士になってほしい。子どもの目線に立つとは、文字通り、しゃがんで子どもと眼を合わせるという意味と、子どもが何に興味を持っているかを知り、それ

らを深めていくにはどのような手立てが必要かを考えて行動できるということである。

（2）実習態度と指導上のポイント

1）実習態度

- ①（意欲）学生は内心では、保育者から何か「言われるのではないか・・・」というような態度で実習している。次第にできるようになればいいのだから、何か言われてもいいではないかと思う。このような態度が目立つと、それでなくても保育現場は命・生身を預かる忙しく厳しい場であるため、実習を受けた側は一般的に実習生に言わない。つまり、あまり指導しないという現実があるのではないか。
 - ・ 子どもへの接し方、見方や、その年齢にとっては難しすぎるとか、発達段階を知識としては知っている必要がある。現実の子どもは十人十色であり、それは環境のなせるわざであろう。しかし実習生は自分がこう言ったら、さっと全員が動く子どもを見ている。例えば、お地蔵さんが並んでいるかのように思っている。そのことを指摘されて、実習生は直そうとはしない。一般的に「言ってください」というような実習態度は見られない。つまり、言われて逃げるような態度や言った人を根に持つ傾向が見られる。どうしたら素直に指導を受けられるか課題である。
 - ・ 学生は何かないかと現場で問われて、「ない」と言うが、その実、分かっていないという現場の指摘がある。それは、分からないことが分かっていないため、質問できないのであろう。
- ②（遊ばせ方）遊ばせ方が分からない。
- ③（表情）表情が固いと子どもには向かない。芯は必要であるが、底抜けに明るく。表情が固いのは、親とそれまでに正面から触れ合っていないからなのかもしれない。また、ゲームをしたりして、人との触れ合いの少ない生活が影響しているのかもしれない。
- ④（感じ取る力）一般的に保育者にゆとりがない。そのことは子どものことを感じ取る力に関わってくる。そのことを子どもは本能的に、直観するのではないだろうか。中には子どもが本当は好きでないのではないかと思えるような、オーラがない保育者も存在する。このようなことには、自分自身が気付いて、自分を変えていく必要がある。実習生についても同様である。
- ⑤（状況を捉え返し、読み取る能力）実習生が養成校に帰って、自分のクラスの指導者は厳しかったとかいろいろ言う。学生は親から叱られたり、言われたりすることが少ないためだろうか、実習生自身のためを思って言った事なのに、そのことが理解できなくて、反感を持つことになっていることが多いのではないか。一方、誉められたらよい実習だったと思いがちなのではないか。状況を捉え返し、読み取る能力がない。

2）指導上のポイント

- ①（具体的な指導のあり方）実習時に指摘すると、その時は“言いやがった”になるが、保育現場に就職すると、納得したと手紙がくる。だから、指導者として辛抱できる。そのうち分かってくると、そのような状況を長い目で捉えて指導している。
 - ・ 自分の周りに小さい子どもが少ないため、手加減が分かっていない。それで指導案を立てても、

難しすぎるという例が多い。

例えば3歳児保育では、子どもに考えさせて、子どものアイディアを生かすように指導することが大切である。一般的には、教師主導になっている所が多いように感じる。

- ・子どもも保育者も楽しめるものでないと、子どもはついてこない。もっとやろう！と子どもが思えるように指導を変えたり、やる気にさせる方法を工夫したりしましょうと指導しているが、実習生は保育の大変さだけが目に付いて、なかなか保育のおもしろさが分からない。したがって、できるだけ実習生の良い点を探して、「〇〇がすばらしいから、大丈夫よ」と後押しをしなければならない。
- ・子どもを楽しませるためには、どういう料理の出し方があるか、その方法を考えて、指導案を立てて実践し、失敗したら、また考えてやるより他はない。
- ・子どもはたとえ0歳児でも、人の眼や、顔をよく見ていて分かるし、抱っこしない人も分かる。1歳になれば、実行に移す。子どもは新鮮であり、子どもに教えられる。そこに実習生が入るわけなので、自分のアンテナを伸ばすように、また子どもの発信していることをキャッチするようにと指導している。

しかし、実習中は、アンテナを伸ばす意味が分からない。そのことを理解するには実習期間が短いので、ボランティアとして現場へ出るように勧めている。不慮の事故や保健関係に気を付けないといけないが、現場へ行けば、子どものかわいさが分かるから。

- ・学生に考えさせるように、指導することが大切である。例えば、「これでは〇〇が足りませんよ」と直接指摘するのでなく、「〇〇やって、子どもが喜ぶと思う？」「もっと〇〇した方が理解が深まるのではないか？」「子どもはどう思うだろうか？」等の問い方をして、学生に考える力を付けてあげることが大切である。

②(笑顔) 実習前の指導ではほほえみ、つまり、営業スマイルの大切さについて指導している。

③(指導案) 指導案の指導については、実習生は朝の2時3時までかかって一次修正をしている。現場では年間案、月案、週案はくわしく書いている。日案は中心のところだけ、月に何回か書いている。指導案は対象によって変わるものである。

(3) 大学への要望・提案

1) 提案

- ①実習の20日間は短すぎる。したがって、自分から進んで現場へ行くように指導している。
- ②子どもの創造的な活動を引き出すような保育が重要である。そのための知識や技術等、総合化されたものをもって実習に出ること。例えば、子どもが喜ぶかどうか、また、子どもに役立つかどうかの見方等、保育の核になるひらめきやアイディアを培うように、養成校でも授業を見直してほしい。保育現場では、それらを使える人にならなければならない。
- ③ボランティア活動をするなど、自分で壁にあたって学ぶことが大切である。現状では、学生も遊びたいからボランティア活動をあまりしているとはいえないし、しんどいからイヤだという声も

耳にする。

④指導案の基本的な事項については養成校で指導すること。

⑤園と養成校が互いに若い人を育てましょうという姿勢が必要である。そのためには、もっと具体的に両方で話し合わなければならないと考える。

2. K市私立B保育園

（1）目的とねらい

1）目的

①とにかく、子どもを大切にしてくれたらいい。かわいい子どもを一生懸命に育てたいという気持ちになってほしい。子どもは自分が大切にされていると思えば、素直に自分を表現できるようになる。それを学べればよい。

・子どもに何を伝えたいか、何を育てたいかという価値観を持って、子どもに対応できるようになってほしい。

2）ねらい

①単位取得の目的の人が多い。単位を取りに来るだけの気持ちではなく、社会人として必要な挨拶や基本的なことを身に付けてほしい。そして保育者になりたいと思って帰ってほしい。

②今日では幼少時からの電化された生活のため、手先を使うことが少ない。実習生は雑巾や箒の使い方も知らない。しかし、保育園は生活の場であり、子どもは指先を使う時期でもあるので、子どものためにもそれを知っておいてほしい。

③実習生は助けてもらわないとできない。できないのがあたりまえだと職員にも実習生にも伝えているので、失敗を恐れないでほしい。失敗から学んでほしい。どこでうまくいかなかったかを考えることが大切である。

④子どもの心を感じて帰ってくればよい。先生の姿を知って帰ってほしい。

赤ちゃんの頃から、子どもに対してしっかりとした基本姿勢をもってやっていこうとすることが大切である。それは園によって違うので、実習生は混乱するかもしれないけれど。

（2）実習態度と指導上のポイント

1）実習態度

①（意欲）

ア（聞いてほしい）学ぶ姿勢が、意欲的とはいえない。

・分からないことや困ったことは当然あるはずなので、分からなければ積極的に聞いてほしい。一生懸命質問してくれれば助言できるのに。

・実習の間は失敗も許されるので、何でも聞いてほしい。

・最近の実習生は、ずっと来てずっと帰る感じである。もっと、先生にすがって甘えてほしい。全日指導の日案も自分の持っている本から引用するのではなく、職員にすがって助言を求めて書けばいいのに。「質問ある？」と聞いても、「ない」と応えるのはだめ。もっと現場でたくさん学ん

で帰ってほしい。

- ・実習の最後に「何かありませんでしたか？」と質問をしても、「何もない」と言う。現場では何もつかめなかったのかと残念に思う。

イ（もっと踏み込んで）最近、保育士と比べて自分の言うことを子どもが聞いてくれないというような反省内容が出なくなった。もっと意欲的に、もっと踏み込んで実習をやってほしい。もっと、考えてほしい。中にはそういう人もいるのだけれど。

- ・子どもに対してどう接したらいいかも、一つひとつ考えないといけない。ただそつ無くこなすのではなく、意欲をもって子どもに対応してほしい。例えば、一部の子どもにべったりくっついていて、子どもの中に入り込めていないのはなぜかと思っていると、保育士にはなりませんとはっきり言う人もある。

- ・福祉の職は時間を問題にするだけではなく、奉仕の精神がないといけない。実習生だからといって、時間なんですよって帰るのはどうかと思う。午後5時になったからといって帰るのではなく、学ぶ場としてじっくり取り組んでほしい。朝の掃除にしても、次の日には、掃除をするのは当たり前になっていてほしいのに。見学の時に何を見ているのだろう。

- ②（謙虚に学ぶ姿勢を）全体にいえることは、保育士になりたくても職が少ないことも影響していると思うが、保育士になりたいかかなりたくないかで本人のモチベーションが違っている。そのことは、保育士にも伝わるので、当然、生身の子どもにも伝わると思う。

- ・何事も一回は尋ねて、それを受け止めてから、反応してほしい。

- ③（やらされている感じ）実習生はしっかり興味を示して、吸収しようという態度が大切であるのに、色々な事をやらされている感がある。

- ④（目的意識を持つ）昨日学んだことを次につなげ、今日は何をしたいと目的をもってやればいいのか。

- ・自分はこういう実習をしに来ましたということが人によってはしっかりしている。中にはきちんと聞ける人もいるけれど。

- ・実習生が園で何を学びたいかを明確にしていると、園側も指導しやすい。実習における自己課題が不明確な場合がある。園のイメージがないと分かりにくいのも分かるけれど。保育実習Ⅰではまだよいとしても、保育実習Ⅱでも、自己課題が不明確な人もいる。

- ⑤（多様な実習生の姿）子どもを大切にしてくれる。お別れ会では涙をこぼす実習生もいる。

- ・最近の実習生はずぶとさが無くなった？弱くなっている。

- ・一生懸命やって、部分指導や全日指導がうまくいなくて泣く人もいる。そうやって次に活かせる人はよい。

- ・実習生には色々な人がいる。多様で差が大きい。言われたとおりにしか出来ない人もいる。

- ・言っても伝わらない人もいる。

- ⑥（基本的生活習慣等）事前打合わせで、挨拶の確認や休む際の連絡の仕方等を言っておかないと

できない。

- ・朝の掃除をすすんでやらない。
- ・最近の傾向から、経験がないので分からないのであろうか。
- ・掃除の仕方も知らないし、雑巾の絞り方から、拭き方も知らない。保育園は生活の場なので、いちいち教えないといけない。時には子どもに教えられているときもある。
- ・常識的なしつけが身に付いていない。学生らしいのんびりさが伺える。

2) 指導上のポイント

①（方針）この実習生達はこういうことができ、こういうことができない等と捉えて、現場では、実習生に合わせて指導している。

②（園側の課題）園でも気軽に尋ねられるような雰囲気にしていかなくてはならないと思っている。

- ・3日間の観察の時にもっと養護面や生活を成立させている環境面について、具体的に説明した方がよいのではないかと。ただ観察するように学生に指示するのではなく、学生は見えて取れていないのではないかと。さらに、一つひとつの行動の意味や子どもへの対応などについても、もっと具体的に言った方がいいのではないかと、これらは園側の課題である。

③（学生側の課題）

ア（園の保育方針の理解）園によって方針はまちまち。実習生はそれが理解できないようで、事前打合わせの時にまず、保育園の考えを説明し、設立者の思いを伝える。なかなか飲み込めないが、その思いを分かってほしい。

- ・保育園は子どもが園に来て仲間と生活する場である。園の考えを知って保育園の方針を知り、それを謙虚に受け止めてほしい。どう受け止めていいるかは分からない。園の子どもは落ち着いている。それはなぜかを知ってほしい。

イ（実習状況・指導上の課題）

- ・（養護について）設定保育にばかり目がいて、反省もそればかり。養護の面がおざなりにされ、つかまなければならないことがつかめていない。
- ・（遊びに入れにくい・遊びに入り過ぎる）子どもが一生懸命遊んでいても、座って見ているだけで、子どもの遊びに入れにくい。
- ・子どもと遊んでくれるのはいいのだけれど、一生懸命遊びすぎてまわりが見えていないこともある。
- ・（指導の流れが読めない）職員が「今はこの計画を実施するよ」と伝えても、状況が読めず、飲み込めない実習生がいる。
- ・（子どもへの目線）子どもに挨拶をする時など、子どもの目線に合わせることは常識なのに、上から見下ろす場合が多い。一つひとつ教えないと、自分からは気が付かない。

ウ（指導案）保育園を知ろうとする中で、指導案にしばられてしまっている。

- ・職員も同様であるが、書くことが苦手である。指導案が書けない実習生も多い。

- ・園の保育方針が分からないので、日案が立てられないようだ。ある程度立ててくれば、助言もできるのに。何も言わないと手が出せない。
- ・全日指導でも、今の子どもがつかめていないので、「指導案を見てください」と言えば、いくらかも見てあげるのに、言わないから手を出せない。
- ・子どもの姿がつかめないようで、ねらいが立てられない。学生は現場を知らないが、年齢やその場に合わせてどうにか書けばいいのに。
- ・環境・子どもの姿・援助と分かれているが、それぞれを理解できていないので書きにくいらしい。何が環境なのか援助なのか分かっていない。言えば分かるようになるが。
- ・子どもの姿・ねらい・活動がばらばらになっていて、総合的に捉えられていない。
- ・活動は思いつくが、ねらいがおさえられていない。職員も然り。でも、それがおさえられると子どもへの声掛けが変わってくる。
- ・設定指導の準備の際に活動さえ自分から出て来ない人もいる。何しに来たのという気持ちになる。
- ・指導案に書くには色々なことがしっかりとつかめていないとだめである。失敗してもいいので、しっかり書けばいいのに。
- ・提出物が遅く、当日の朝提出されると、しっかり見てあげられない。書けないのかな？
- ・全日指導を昔は2日間やっていたが、書けないので今は1日にしている。部分指導も、昔は午前全部か午後全部のように長い部分指導をしていた。今は1時間ぐらいの短い部分指導にしている。
- ・未知の場所に飛び込んでくるのだから、分からないのは普通である。
- ・毎日の保育の流れなどは園が立てている。

エ（日誌）実習日誌があるばかりに、子どもの姿が見えない人がある。

- ・初日の活動は園が書いてあげていたが、書式が変わってからは、保育の流れを見て書いてもらっている。配慮点などは実習生が見てつかんだものを記入し、その後に指導している。
- ・日々の日誌は職員の助言が入るので、全くの白紙から書くわけではない。
- ・朝提出した日誌については、その日の昼に10～15分間の指導をしている。
- ・ノートもそうで、本人の考えかなんかが反映されていたらいいのに。

オ（オリエンテーション）事前に言っておかないと実習生はできないので、出勤時間や挨拶などについて伝える。実習生といえども職員の一人なので、心構えが必要である。

カ（反省会）反省事項を各指導者から出してもらい、それを見て園長も最後に反省会をする。主任は中間の反省会をしており、注意事項を言うようにしている。

- ・反省会をしても、つらかったとか嫌だったとかすぐに口をついて出てくるので、困る。園側も言葉を慎重に選ぶなど、実習生への接し方が難しい。
- ・反省会では、先生方の子どもへの関わり方についてたくさん出てきている。
- ・反省会は夕方5時頃から始めている。子どもの中で反省会をするよりも、子どもが帰ってからの方が落ち着いてできるのだから、少し残っていてもいいのでは。

（3）大学への要望・提案

1）要望と課題

- ①学校で指導案のどこが書きにくいかに聞いてほしい。
- ②園によって違うが、学校では全ての園に共通する書き方を勉強して来てほしい。ボランティアで色々な園に行っても多様性を知るのもいいかもしれない。
- ③最近の人は書くことが苦手かもしれない。事務文書が多いのは大変である。書くのが上手だといいうわけではないけれど、まとめないと頭に入らない。したがって書くのを減らすのは良いとは言えないが、学校に帰ってしっかり書くのもいいのではないか。実習では、指導案の作成や様々な用意で大変だから。
- ④全日指導や部分指導など実習生が自分で立案する時に、園はどこまで手を出していいのか分からない。
- ⑤園側は実習生にどれだけのことなら要求していいのか。例えば、ケガの対応等一人の職員と捉えていいのか。

2）提案

- ①今1回目の実習は部分指導2回、全日指導1回で実施しているが、特に赤ちゃんの姿を捉えて指導案を立てるのは難しいので、観察・参加実習を10日間実施して保育士の行動や保育の流れ、一人ひとりの子どもに対する接し方、関わり方等をメモする。そして2回目の実習で、部分指導3回、全日指導1回をするのでいいのではないか。

3. O市公立C保育園

（1）目的とねらい

1）目的

- ①（社会への一歩）自分を振り返ると、家庭から通っていたし、バイトもそれほどしていなかったもので、実習で初めて社会へ出たと言ってよいであろう。ハンコの押し方、つまり、まっすぐキチンと押すこと、花の水換え、掃除の仕方など、小さなことで、保育と関係ないようなことだが、社会に出て必要なことを実習で一つひとつ少しずつ教えてもらった。
- ②（仕事にするかどうか）実習で子どもと遊んで、苦しくても頑張れそうなので、こんな仕事をやりたいと思ったり、向いてないな～と思ったり、いろいろ考えられる場であればいい。
- ③（子どもを見る眼）若いときは子どもと一緒に力一杯遊べる。一方、30人も子どもがいても、全員の気持ちの揺れとかがアイコンタクトで知れることもあるなど、年を重ねることによって見る目が豊かになる。

2）ねらい

- ①（子どもを知ること）「子どもを知ること」を実習の重要なねらいに位置付け、そのことを現場に指導すれば、現場も変わる。子どもの指導は最初からは無理である。まずは子ども一人ひとりを知って、おおよその子ども像をつかむことが大切である。

(2) 実習態度と指導上のポイント

1) 実習態度

- ① (子どもを知らない) 実習生も多くは核家族で生活しているので、子どもを知らない。世の中の移ろいで、実習生も可哀想である。子どもの姿も知らないのに目標を立てて計画を立てることなどできない。最近は縦のものを縦に拭くということも分かっていない。

2) 指導上のポイント

- ① (学生観と指導) 子どもの見方も言わないと分からないので、以前よりだいぶゆるやかに実習生を指導している。例えば、昔は1～2時間の睡眠で実習の終わりごろに倒れそうになりながらやっていたが、今は書類を作成する時間を確保して、しっかり寝るように指導している。
- ② (子ども像を知る) よく子どもを理解していますかという評価項目ならいいのに。先生になろうとするから難しい。現場でも4月でクラス替え直後は、保育士はしっかり子どもと遊んで友達になるところからはじめるのに。

まずは一人ひとりの子どもを知って、子ども像を知ろうと頑張る実習生は評価できる。2週間でまとめようとするのは無理である。最初からは分からない。反省の時も教科書に出ていないような体当たりの反省を出してほしい。2週間で全日指導をしようと思ったら、全体を知らないといけないので一人ひとりを知るのは無理である。

最初に実習がうまくこなせたからといって、いい保育士になるわけではない。

- ③ (個と全体) 2週間では個別に関わる指導ができない。集団に関わる必要があるので、個別に関わっていると全体が把握できない。したがって、特に、発達障害の子には関わってほしくない。それは、それまで積み上げてきたものが一瞬で壊されうるし、命に関わっているので実習では関わらないでほしい。そうでなくてもクラスが荒れるから。
- ④ (得意なことを) 実習生が入るとクラスは混乱するが、若い人には得意なことをしてほしい。例えばダンスなど、それが発表会につながったことがある。
- ⑤ (良さを伸ばしてあげたい) その人の良さを見ることができたら、保育士にも子どもにもよい刺激になるのに。それをもっと伸ばしてあげたい。
- ⑥ (実習の進め方) 実習は昔の通りではだめ。半分は子どもを知ることに費やしたほうが良い。実習の前半では、先生という名前をはずしてみるのはいかがでしょうか。先生でない人は先生と呼ばなくてもよいのではないかと。しかし、それは子どもの発達によって考える必要があるかもしれない。次の実習に来た時には先生に変わっているのも、子どもにとって変な感じであるようにも思える。このことは難しい。

先生と言ったら、指導をしないといけない。実習では午前中の保育を3回ぐらいやってみるのでもいいのではないかと。1日中の実践は大変である。ベテランの保育士でもずっと見られるのは辛い。何回やってもいいよとか、失敗してもいいよとは言えないし。

(3) 大学への要望・提案

1) 提案

- ①保育士も色々なので、子どもとの関わり方も色々である。2年制・4年制の実習でどこまで望むかを決めてほしい。
- ②「子どもを知ることが重視するように」と現場を指導したら現場も変わる。そうでないと、指導できないという気持ちを持って実習を終える実習生がたくさん出ることになるであろう。このことを「実習の手引き」の中に明記するのはどうか。
- ③学校側が全日指導をしなくて良いというならやらせないのに。現状を考え、大学からその意向を下ろしてほしい。実習では全日指導をしないといけないと園側では捉えているが、部分指導だけでもいいのならば、大学ごとでもいいので決めてほしい。そうでないと保育士が困る。午前中の指導を3回やらせて下さいなどと、打ち出してほしい。もちろんクラスを修正しないとイケないので、続けて3日は困るが。
・現在では保育所職員も100パーセント部分指導や全日指導をしないとイケないと思っている。このような考え方は上から伝達されてくるので、意識改革をするなら、園長会などで、しっかり言ってほしい。
- ④日々の生活で子どもの命を保障するのが大変である。その中で実習生を受け入れるのは大変である。書類も書いてもらわなくても良い。書類を減らしたらいいのに。実習の思い出としては日常の触れ合いが残るので。それに保育士が言ったことが日誌に書かれていないと、指導していないことになるので、もう一度書いて指導しなくてはならない。今の実習生は日誌を書くのも大変である。本当はゆっくり指導してあげたいが、自分のクラスを見ることで大変なので、時には実習生の存在を忘れてしまうこともある。2回目の実習で指導を多少入れるのはどうか。午睡指導などやらなくていいのではないかな。このようなことは、大学が指示してほしい。
- ⑤大学が、体験学習のような機会を設けるなど、実習を捉え直すことが大切である。例えば夏に「きていいよ～」と声を掛けて子どもたちを大学に集めて、学生が子どもたちに触れられるようにする。このようなことを度々やっているうちに、学生はどのようなことで子どもが喜ぶかを自分で考えるようになるのではないかな。

以上、3園における実習についての考え方と実践事例を検討した結果、次の点が明らかになった。第一に、3園それぞれの保育の営みを背景に、実習についての考え方や課題意識は一様ではない。現在のところ各園で何に主眼が置かれているかについては、A園では、より良い保育士養成を目指して、現在の学生の状況を踏まえた具体的な指導のあり方であり（例えば、「学生に考えさせるように指導することが大切である。例えば、『これでは〇〇が足りませんよ』と直接指摘するのではなく、『〇〇やって、子どもが喜ぶと思う？』『もっと〇〇した方が理解が深まるのではないかな？』『子どもはどう思うだろうか？』等の問い方をして、学生に考える力を付けてあげることが大切である。」など）、B園では、園の保育方針を踏まえて、どちらかといえば、現在の学生の实習態度や実習状況を課題

視しており（例えば、「子どもの目線に合わせることは常識なのに、上から見下ろす場合が多い。一つひとつ教えないと、自分からは気が付かない。」など）、C園では、子どもを知らないという現在の学生の実態にいかに対応するかが問われている（例えば、「子どもを知ることを実習の重要なねらいに位置付け、そのことを現場に指導すれば、現場も変わる。子どもの指導は最初からは無理である。まずは子ども一人ひとりを知って、おおよそその子ども像をつかむことが大切である。」など）。

第二に、3園に共通して見られる考え方や捉え方もある。それは、次の3点である。まず、学ぶ姿勢が意欲的とはいえないことである。保育士から何か「言われるのではないか」というような実習態度が見られ、何か指摘されると反感を持つ実習生（A園）、分からなければ保育士に積極的に聞いてほしいが、問いかけても何もないと答える実習生、またいろいろな事をやらされている感があること（B園）、子どもの見方も言わないと分からないので、以前よりも大分ゆるやかに指導している事などが指摘されている（C園）。

次に、子どもの姿が把握できないことである。例えば、自分の周りに小さい子どもが少ないため、手加減が分かっていない。それで指導案を立てても難しすぎるという例が多いこと（A園）、実習日誌や指導案にしばられて子どもの姿が見えないこと（B園）、子どもの姿も知らないのに目標を立てて計画を立てることなど出来ないことなどが指摘されている（C園）。さらに、子どもの発信していることを感じ取る力に自ら気付いて、自分を変えていく必要があること（A園）、日誌等に実習生自身の考え方などが反映されていたらいいのにと（B園）、教科書に出ていないような体当たりの反省事項を出してほしいなど（C園）、実習生自らに期待している園側の姿が読み取れる。

第三に、実習態度の捉え方は同じでも、それを踏まえて実習生をどのように指導するかについては、状況が異なる。例えば、実習生に考える力を付けるための指導を重視する考え方がある。その具体的な指導方法としては、直接に指摘するようなやり方ではなく、「○○やって、子どもが喜ぶと思う？」等の問いかけをするのである（A園）。一方「全日指導でも、今の子どもがつかめていないので、『指導案を見て下さい』と言えば、いくらでも見てあげるのに、言わないから手を出せない」という指摘や、実習生が見て取れていないようなので、「一つひとつの行動の意味や子どもへの対応などについても、もっと具体的に言った方がいいのではないか」という考え方が見られる（B園）。後者の指導の仕方は、実習生への働きかけの点において前者とは異なると考えられる。さらに、子どもを指導することを学ぶよりも、その前にまず、子ども像を知ることの大切さを強調する立場がある。「実習は昔の通りではだめ。実習期間の半分は子どもを知ることに関心した方がよい」という考え方である。そうしないと、出来ないという気持ちを持って実習を終える実習生がたくさん出ることになるという見解である（C園）。一般に、これまでは保育士になることを一応前提にして指導が行われることが多かった。しかしこの考え方によると、実習は、子どもと遊んで、仕事として向いているかどうか等、いろいろ考えられる機会であれば良いと見なされている。

第四に、3園のうち2園に共通して挙げられていることは、失敗から学ぶこと、生活力の無さとその必要性、考える力を付けることやその人の良さを伸ばすことなど、実習生の育ちへの、指導者

としての対応の視点である。

大学への要望・提案は当然のことながら上記の実態を反映したものであるが、対応できることと対応できないことを選定し、保育現場と連携しながら養成しなければならないことは言うまでもない。

Ⅲ 総括的考察及び課題

実習施設としての保育園はその保育方針、規模等、様々な状況のもとに営まれている。そのような状況の中で、ほぼ共通してみられるのは、現在の学生の実習態度について、学ぶ姿勢が意欲的とは言えないという見解である。例えば、内心では指導者から何か言われるのではないかというような態度、何か言われると逃げるような態度や言った人に反感を持つような態度などが見られ、どうしたら素直に指導が受けられるか課題であるという見解がある。一方、分からないことや困ったことは当然あるはずなので、分からなければ積極的に聞いてほしいとか、一生懸命質問してくれれば助言できるのという見解、また、実習生が見て取れていないように感じるのも、もっと具体的に言った方が良いのではないかと考えているという見解がある。前者からは、何か指導者から言われたり、指摘されたりすることを厭う実習態度を、後者からは、自分から指導者に関わって行かない、または問題意識がない等で、そのようにできない実習態度を読み取ることができる。両者は一見すると反対の状況を示しているように見えるが、指導者と学ぶものの関係の観点からすれば、関係性を避ける態度や関係性の稀薄さを意味している。専門家教育においては、実習において、学び手の実践に応える関係性の中で教育が行われるという観点からすると⁴⁾、このような状況は時間をかけて十分検討されなければならない。その際、一つには、学生の学び方や学びの内容に関する学習状況を問う必要がある。一方では、学生が変容しているにもかかわらず、これまでの指導のスタイルを変える必要性に気付いていないか、あるいは今日の正規の職員の減少傾向の中で人手が足りず、指導しようという気持ちはあっても実習生をゆっくり指導する余裕がないという保育現場の現実も、保育現場により状況は異なるにせよ、視野に置く必要がある。

実習の進め方について、現在の学生はあまり子どもを知らないのも、実習期間の半分は子どもを知ることに費やした方が良いのではないかという見解がある。それは、子どもを見つめ、子どもとは何かを知り、実際に子どもと信頼関係を結べるのが第一に重要であり、子どもを知らないで指導技術の習得を急いでも、真の意味で成長できないという見解である。そしてそうしないと、出来ないという気持ちを持って実習を終える実習生が大勢出ることになるのではないかと憂慮されている。現在、乳児クラスの実践で同様の考え方で指導をしている園が見られる。このことに関連して、実習期間を長くした方が良いという意見がある。また、全日指導をしなくてもよいのならやらせないで、大学から指示してほしいという要望もある。一方、これらの事についてあまり意識していない園も見られる。このような状況を顧みると、現場と密接に連携しながら、養成校は実習を捉え直し、実習の進め方を具体的に検討していく必要があると考えられる。

日誌や指導案について、現在、子どもが見えていないので指導案作成が困難であること、また日誌や指導案にしばられて子どもの姿が見えないこと等の意見が多く挙げられている。前者については、養成校でもっと子どもに触れられる授業を考慮する必要があること、またボランティア活動などで子どもに触れるように奨励すること、さらに何らかの形で大学において子どもに触れる機会を用意し、このような機会に多く触れることで、どのようなことで子どもが喜ぶかを自分で考えるようにすることが大切なのではないかという提案がある。ドナルド・ショーン (Donald A.Schön) が言うところの「状況との反省的対話」の機会を学生が持てるように、意図的に養成校がその機会を作っていくということであろう。

指導観についても、実習の進め方についても、現実には実習施設により様々な見方や考え方があことは明らかである。しかし、専門家としての成長を考慮するとき、目指すべき方向としては、保育現場と密接に連携しながら、学生自身が保育とは何かの省察を行い、様々な発見を行うことができるようにすることである。そのためには、実習の際の指導者を、自らを写す鏡として捉えることができるようになることが重要であり、そのように学生を支援することが望まれる。

より良い保育士養成のためには、このことは養成校においても、保育現場においても、重要な点として理解される必要があり、両者の連携の基本に据えられる必要がある⁵⁾。このような視点を分かち合い、保育現場と養成校とが協働できる機会や場を設定することは、現在きわめて重要であり、緊急の課題である。実践を見通したカリキュラムの検討や授業の見直し、学生への情報発信等について、きめ細やかな対応が養成校に求められている。

註

- 1) D.A. ショーン『専門家の知恵』佐藤学・秋田喜代美訳、ゆみる出版、2001年、218－221頁。
岡本・矢藤・諏訪・光本「保育者養成の再検討Ⅲ－保育士養成課程のカリキュラム改正と保育士の専門性－」『岡山県立大学短期大学部研究紀要』（第10巻）、2003年、93－105頁参照。
- 2) 全国保育士養成協議会編『効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅲ』（保育士養成資料集第42号）、2005年、57－91頁。
- 3) 全国保育士養成協議会編『効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅱ』（保育士養成資料集第40号）、2004年、74－76頁参照。
- 4) D.A. ショーン『専門家の知恵』佐藤学・秋田喜代美訳、ゆみる出版、2001年、155－161頁。
- 5) 全国保育士養成協議会編『保育士養成システムのパラダイム転換』（保育士養成資料集第44号）、2006年、137－142頁参照。

（2006年10月31日受付）
（2006年12月25日受理）